

海外における社会科学習の教材化

前バンコク日本人学校 教諭

青森県八戸市立湊中学校 教諭 中 田 康 久

キーワード：社会科，中学校，教材化，タイ

1. はじめに

社会科の授業で「タイ」が題材になる部分は歴史的分野において山田長政（江戸時代，朱印船貿易）と泰緬鉄道（太平洋戦争）ぐらいのものである。また，地理的分野においてはほとんどないに等しい。

しかし，縁あってタイ国に派遣され，現地の生活習慣や文化に触れることで歴史と伝統があり，優れた文化を持つことを知り，上記の題材の他に日本の歴史学習に生かせる部分はないかと考え，派遣当初は「タイにおける歴史学習の教材化」というテーマを設定した。

しかし，フィールドワークを進める中で，地理的分野，公民的分野，更に国際理解教育の教材になり得るものも発見し，また，3年間の派遣期間中に訪問した任国外においても，タイにはない素材を発見できるようになり，調査の幅を広げてみた。

今回は派遣先であるタイ国内で発見した素材と任国外旅行で発見した素材とそれらを素にした授業実践の例を紹介する。

2. 調査・研究と実践

(1) 任国内（タイ）において教材化できる素材（歴史的分野）

・バーンチェン遺跡出土の土器

日本の縄文土器や弥生土器との比較が可能である。4大文明の他にも優れた文明があったことを紹介することができる。なお，バーンチェン遺跡は現在世界遺産に指定されている。

・満州事変後のタイ

バンコク在住の瀬戸征夫氏の著書から発見した素材。満州事変後の日本の無謀な行動は世界全体から非難を浴び，日本人排斥運動がタイ国ブーケット島でも起こったという事実を語り，日本が世界から孤立していく様子を紹介することができる。

・様々な国の狛犬

王宮博物館に常設されていた各国の狛犬からの素材。様々な狛犬があり，見るだけで楽しいので，児童生徒の興味関心を引きつけられる。また，「各国の様々な狛犬がタイにあるのはなぜか？」という課題で問題解決学習としても活用可能である。狛犬は空の貿易船の重石として使用されたことを考察させ，当時の盛んな貿易の様子や貿易相手国を知る手がかりとなり得る。

・イスラム教の学校

タイは仏教国として有名であるが，タイ南部に行くとイスラム教徒も多くなる。学校の様子を紹介することでイスラム教の特徴も紹介することができる。例として，児童生徒の服装，男女別学，宗教の時間，給食のメニューなど衣食住中心に紹介することが可能である。

・中国国民党残党の村

第2次世界大戦後の中国情勢の学習時に国民政府は台湾に逃れたことを紹介するのだが，同時期にタイ北部にも

一部の人達が逃亡してきた事実を紹介できる。現在も中国の文化を継承するためにこの村の小中学生は週末に中国語の補習を受けている事実もある。タイ北部チェンマイで亡くなった歌手テレサ・テンとの関係も噂されるが、深入りしないように配慮することが必要である。

・日本の明治維新とタイのチャックリー改革

帝国主義の動きが強まり、東南アジアの多くの国々が欧米諸国の植民地となる中、タイだけが独立国として存在できたのは、チュラロンコン大王（ラマ5世）がチャックリー改革を行い、いち早く近代化したいきさつがある。チュラロンコン大王の生涯を調査していくと日本の明治天皇と類似している部分が多く、同時期に独立国を保とうとした日本を学ぶ上で貴重な素材となり得る。

(2) 任国内（タイ）において教材化できる素材（地理的分野）

・メコン川雨期と暑期の水量

タイとラオスの国境を流れるメコン川へ5月と8月に訪れたところ、同じ河川でも季節によって水量が違うことがはっきり分かった。2枚の写真の比較により、気候の特徴を把握する上で視覚的な資料として活用できる。

・タイ・ラオス国境

メコン川が国境となっており、対岸で国家が異なるため、地形に沿った国境の決め方の例として比較的分かりやすい資料として活用できる。タイ・ラオス友好橋や小型船によって国境を越えることは容易であるため、日本人にとって不思議な感覚である。

・日本の地域区分

日本をいくつかの地域に分ける方法としてたくさんの方が考えられるが、「東日本」と「西日本」の2つに分ける場合、主に言葉や生活文化によって分けている。資料集等で紹介されている1つの例としてカップ麺（うどん）の汁の味付け、味の濃さで分ける方法がある。カップ麺の器には西日本人々が好む薄口は（W）が、東日本人々が好む濃い口には（E）が表記されている。

全国各地から児童生徒が集まるバンコク日本人学校の特徴を生かして、一時帰国した際に近所のスーパーでどちらのカップ麺が販売されているかの調査を行い、「カップ麺の味による東日本と西日本の境界線を決定しよう」という課題を出すことにした。

ところが、数日後に生徒達からバンコクの大手日本人向けスーパーにおいて（E）も（W）も販売していることが判明し、「東西の境界はバンコクだ」という笑い話のような結果になってしまった。

最終的にはこの調査を行うことは困難であったので取りやめたが、言葉の違いや食べ物の違いなど日本全国から集まる生徒達の生の情報や日本での体験談は具体例として大いに活用できる。

・日本の川と世界の川

日本にもタイにも大きな悪影響をもたらした「タイの洪水」という社会的事象は日本の洪水とは異質なものであったために教材化することができた。

8月にタイ北部で降った大量の雨が2～3ヶ月後にバンコクに洪水をもたらすことからヒントを得て、日本の川（短くて急流）と世界の川（長くて緩流）の違いを考察する授業に活用することができた。

・タイと日本の農業比較

スコタイ、チェンマイ方面への修学旅行においてツアーガイドがタイの稲作について話してくれた内容をもとに展開することができた。タイにおける米の生産者価格はタイ米1kg = 40バーツ（約120円相当）、日本米1kg = 50バーツ（約150円相当）程度と破格の安さであったり、二期作の状況など現地の人でなければ分からないような情報を活用して、日本の農業の特色を導き出すことができた。

・タイと日本の賃金比較

日本の工業における近年の動向の特徴として「日本企業の多国籍企業化」を取り上げた際に、日本企業が海外

進出する理由として豊富で安価な労働力を挙げることができるが、具体的な事例として日本とタイの賃金比較を行った。タイの人件費が安いことは生徒は承知しているが、どれくらいの差があるのかを日本の賃金を100とした指数で表示した日本の100に対してタイは7.6でありその差に驚きの声も上がった。

(3) 任国内（タイ）において教材化できる素材（公民的分野）

・海外青年協力隊の体験談

本校の教員の中に海外青年協力隊の経験者やODAのモニター経験者が複数おり、その体験談を聞くことにより日本の国際協力の様子を具体的に紹介することができた。大規模校の本校だからこそできるものと思われる。

・ランバン象病院

修学旅行事前学習において訪問地であるランバン象病院の「地雷を踏んだ象モーター」を取り上げた。世界初の象病院では人間の仕掛けた地雷を踏んで大けがをしている象が心と体のケアを受けている。この事実を例に平和教育の題材として社会科のみならず、道徳の教材にもなり得る。

(4) 任国外旅行先での調査、発見した素材

・イタリア・バチカン市国国境

イタリアの首都ローマ市内にある、世界最小国家である。イタリアに入国すればそのままバチカンにも入国できるのでこのことについても日本人には不思議な感覚である。イタリアとバチカンとの国境は高い塀で仕切られており、注意しないと国境に気づかないという点やを徒歩で周遊できる点で生徒の興味関心を喚起できる。

・トルコ・ギリシャ国境

エーゲ海に浮かぶ小さな島々はトルコの領土ではなくギリシャ領土になる。自分の目で確認できるような島々が外国という感覚は日本では最端の地域でしか感じとれないことである。

・アジア・ヨーロッパ州境

トルコ・イスタンブールはアジアサイドとヨーロッパサイドのに分かれ、それぞれ特徴のある町並みを形成している。黒海とマルマラ海の間にあるボスポラス海峡を境にアジアとヨーロッパに分かれる。中学1年では6大陸と6州の学習を行う時の貴重な資料となり得る。

・ヨーロッパの位置

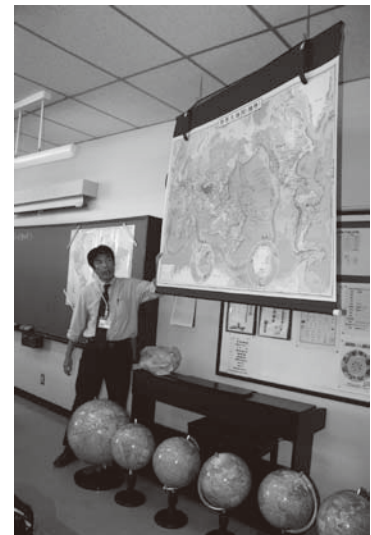
日本よりも高緯度に位置することを理解させるための教材として、時計の時刻と空の明るさを示す写真を撮影した。夏のパリは20時でも明るく、日没は21時以降となる現象は日本ではあり得ないので、日本の夏の日没と一緒に提示することで効果が生まれると考えられる。

・ヨーロッパの気候

真夏でありながら、枯れ葉が多く道ばたに散乱していた事象から、「夏に乾燥する」という地中海性気候の特徴を掴むことができた。季節風の影響による蒸し暑い日本とは異なる現象であり、世界の気候区分を説明するときの資料となり得る。

・EUの経済的な統合

共通通貨のユーロを複数国で使用できるだけでなく、鉄道による国境通過もノーチェックで済んだ。実体験を導入部分の話題として使える。また、同じユーロ硬貨でも国毎にデザインが異なるなど実物のユーロ硬貨活用して各国の個性を紹介し、興味を喚起する話題となり得る。



中学1年部地理学習の様子

3. 3年間の調査・研究をふり返って

(1) 教材になり得るものの調査・研究の視点が「モノ」から「事象」へ

3年間の調査・研究によってたくさんの教材になり得る素材を見つけ出すことができた。調査・研究をスタートさせた当初は歴史的分野の内容しか思い浮かばず、ひたすら遺跡を巡ったり、博物館、美術館等で著名な作品や遺物を見学し、写真に記録するばかりであった。しかし、本校の宿泊研修、修学旅行や個人での任国内旅行、任国外旅行を重ねるごとに、日本では（青森県では）見られないような光景、あり得ないような事象、など現地の人達にとっては何気ない事が教材化できる素材として見えてくるようになってきた。また、最後の年にはリアルタイムで実際に起きている事象を教材にすることができ、タイムリーな素材を使つての授業が実施できた。タイムリーな素材は生徒の興味関心を強く引きつけることを改めて確認できた。

(2) 教材になり得るものの調査・研究の視点が「モノ」から「人」へ

調査・研究当初には思いも浮かばなかった。「人材」というものにも運良く出会えることができた。これは、多くの日本人が駐在しているタイ、バンコクだからできたものであり、日本人の少ない、したがって日本人学校の規模の小さい学校では困難な発見であったと思う。

人材については平成21年度に宇宙飛行士の若田光一氏がゲストティチャーとして来校し、出前授業を実施したいきさつがあり、専門家を招いての授業をイメージしていたのだが、本校の特徴である世界一大規模な日本人学校には身近にたくさんの「人材」があり、活用の幅を大きく広げることができた。「国際協力」「国際理解」については青年海外協力隊員を経験してきた先生の経験談、「タイの伝統文化に」についてはタイ語教師、そして「日本各地のご当地の様子」は日本全国から集まる本校の児童生徒からの情報など日本では体験できないことを授業で実践することができた。

(3) 教材になり得るものの調査・研究の視点が「導入部」から「展開部」へ

調査・研究当初は教材になり得る素材は授業の「導入部」において生徒の興味関心を引きつけるインパクトのあるものを追い求めていた。もちろんインパクトのある素材を教材化することにより、ワクワク感ある授業を展開することは可能であったが、小学6年生から中学1年生、2年生と担当学年が上がると発達段階に合わせた教材も必要になってくることに気付いた。もともと資料の読み取りと資料をもとに思考し、判断することを苦手とする生徒が多かったために、「展開部」で活用できる教材（資料）の開発も行った。その中で教材として効果的であったものは「比較」できる資料であった。主に日本の国土や産業の特徴を押さえるための比較資料として活用したが、日本の特徴を掴むだけでなく、タイの特徴、タイと日本の結びつきを知る上でも貴重な教材となった。

4. おわりに

派遣される以前から中学校社会科教師として感じていたことは、自分自身の目で見たことも、自分自身の肌で感じたこともないのに、いかにも自分が体験してきたかのように、授業で語る自分がいたということである。常々、このことに違和感を感じていた。是非、自分の目で世界にあるたくさんの社会事象を体験し、その経験をもとにリアルで生徒の心に響く授業をしたいと考えていた。

今回、バンコク日本人学校にという在外教育施設で勤務するチャンスを頂き、念願であった「自分の目で確かめる、肌で感じる」活動ができて、達成感を感じている。同時に、視野を広げることにより、自分自身も今までよりも社会事象に対して多角的・多面的に考えられるようになったのではないかと感じている。

この貴重な経験を原籍のある青森県の社会科教育、そして将来を担う中学生達に還元していきたいと考えている。